

---

# 鬼の女～血の娘～

獅兎羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鬼の女ゝ血の娘ゝ

### 【Nコード】

N9807Z

### 【作者名】

獅兔羅

### 【あらすじ】

鬼兵隊の鬼の女 芦咲あしざき 露吞あいのは真選組の隊士殺しを高杉から頼まれる。そこで懐かしい人たちに出会う。

「お前らは恨まないのか……。この世界を恨まないのか。」  
別れ際に言った女性の一言に懐かしい人たちは昔の人の面影を感じ・  
・・・。

## 第一訓 掴みどころがない男

貴方に会えてよかった。

私がそう思ったのはいつのことだろうか……。

「ねえ晋助。貴方はなにを考えているの？」

赤色の模様が入った着物を着た女性が言った。

しかし、その模様は血だった。

それも、全て自分の血ではない他の人からの返り血。

「さあーな、俺にもそれはわからねえーことだ。」

冷たい声で高杉は言った。

「貴方は本当に掴みどころのない男ですね。」

女性は笑顔で言った。

「それはオメーもだろ、あらの霰呑。」

高杉が言った。

「私はおんなよ。」

笑顔で言った。

その笑顔を見る高杉。

「そうだ、露吞。ひとつ頼んでいいか？」  
「なんでもどうぞ。」

露吞は笑顔で言った。

「真選組の隊士何人かを殺してくれないか？」

高杉が言った。

「私、一人ですか？」

露吞が聞く。

「オメーなら簡単だろ？」

冷たい声で言った。

「ええ。分かりました。」

露吞はそう言つと船から降りて行つた。

「露吞・・・いや、春楨しゅんかお前は先生を奪つたこの世界を恨まないのか？」

高杉が言った。

かなしさを含んだ声で。



**第一訓 掴みどころがない男（後書き）**

露呑の本名は芦咲 露呑です。

春榎の正体はこれから分かりますよ。

感想お願いします

## 第二訓 隊士殺し（前書き）

残酷表現あります。

苦手な方はお控えください。

## 第二訓 隊士殺し

「邪魔するぜ。」

真選組の屯所にはなぜか銀時と神楽、新八が居た。

「で、依頼っつーのはなんだ？」

銀時が言った。

「それはな・・・『ドーン』・・・なんだ？」

土方の声を大きな音が遮った。

「副長、大変です。攘夷浪士が攻めてきました。」  
「なに！？」

土方が声を上げた。

土方は刀をとり、外へ走り出した。  
その後を万事屋組が追いかけた。

「あらら、真選組ともあろうに弱いんですね。」

土方たちが外へ出るとそこには一人の女性が居た。  
女性の着物は血に染まり、頬にも返り血が付いている。  
その女性の前には倒れている真選組の隊士が居た。  
そして、近くには山崎が刀を構えている。

「山崎！！」



土方が叫んだときにはもう遅く、女性は刀を振り下ろした。

ドーン。

「ぐっ……。」

「だ、旦那……。」

女性の刀は銀時が止めていた。

「あらら、なかなかやるのね。白夜叉。」

女性が言った。

「お前なぜそれを？そのことを知ってんのは数すくねーぞ。」

銀時が驚いて行った。

「晋助から聞きました。」

女性が言った。

「お前……何もんだ？」

土方が言った。

「私は芦咲 露吞の申します。鬼兵隊の総統補佐ですわ。」

露吞が言った。

「總統補佐だと・・・？」

土方が言った。

「はい。晋助に一番近い幹部ですわ。」

そのことに驚きを隠せない土方。

「今回晋助からの真選組の隊士殺しをしろと言われたので参上いたしました。」

「隊士殺しだと！？」

土方が声を上げた。

露吞は笑っただけだった。

「お前俺と会ったことがあるか？」

銀時が言った。

「私は知りませんが、晋助は俺のなじみだと。」

露吞が言った。

「では、私はお暇させてもらいますわ。」

露吞はそう言い、去って行った。

私は嘘をついている・・・。

銀時。

貴方に会えて嬉しいのに・・・。

嬉しくてたまらないのに。

私の・・・初恋の人。

## 第二訓 隊士殺し（後書き）

どうでしたか？

感想をお願いします。

### 第三訓 初恋の相手（前書き）

この話で・・・銀時がぶっ壊れます。  
銀時ファンの方、見ない方がいいです。  
ショックを受けます・・・。

### 第三訓 初恋の相手

「お前らそこに居ろ!!」

銀時はそう叫び、露吞のあとを追った。

露吞は塀に向いて肩を震わせていた。

「露吞だっけ？」

不意に声をかけられて、露吞が振り返る。  
その目は赤かった。

「あら、来たのですか？白夜叉。」

露吞が言った。

「オメーこそ何やってる、こんなところで泣いてよ。」

銀時が言った。

「泣いてなどいませんわよ。」

露吞が言った。

「強がりには昔から変わらねえーな。」

銀時が言った。

その声に露吞は肩を落とした。

「はあー、気づいてたの？」

「当たり前だろ？」

そんな二人の様子を電柱の影から土方、沖田、神楽、新八が見ている。

「あの二人知り合いかいネ。」

「そうですネイ。」

「あんな美しい顔して人を斬るなんてな。」

4人はそんな会話をしている。

「お前、髪切ったんだな。」

「晋助が短いほうが似合うって。」

露吞は笑顔で言った。

「なあ、春樹。」

「その名前で呼んでくれるんだ。」

さつきよりさらに笑顔で言った。

「なんで総統補佐なんかに？」

銀時が聞いた。

「不思議じゃないでしょ？戦時中だって鬼兵隊の副官だったから。」  
「そうだけだよ……。」

銀時が少しか小さな声で言った。

「もしかして心配なの？」

露吞がからかうように言った。

「んなことない！！」

銀時が言った。

それを見てクスクス笑う。

「ヅラは元気にしてる？」

「ああ。」

銀時が言った。

「そうなんだ。また会いたいな。」

露吞が懐かしそうに言った。

「きっと会えるぞー。」

あっさり言う銀時。

「そうね。指名手配なのにあちらこちらに居そうだもん。」

露吞が言った。

「高杉も変わらないだろ。」



聞きなれた声がした。

「ッラ!？」

銀時が驚いた声を出す。  
沖田と土方が身構える。

「春榎も一緒か？」

「あらい瞬で分かった？」

露吞が聞く。

「当たり前だろ……。村塾のマドンナだったからな。」  
「やめてよ。そんな言い方。」

露吞が笑う。

「じゃあ俺行くわ。」

ッラはそう言い、去って行った。

「晋助も変わりないか……。」

露吞はそう呟き、クスツと笑った。

「昨日も散歩に言って怪我して帰ってきたんだよ。」

露吞が言った。

「あいつは本当に変わってないな。」

銀時が言った。

「変わったよ……。だって昔はあんなじゃなかったじゃん。」

露吞が言った。

銀時も曇った顔を見せた。

「ねえ、銀時。昔に戻れると思う？戦時中や村塾の時に……。」

露吞が聞いた。

「さあーな。それは、高杉の考えによるだろ？」

「そうだね……。」

露吞が言った。

「銀ちゃんなんか幸せそうネ。」

神楽が言った。

「銀さんがあんな顔するの見たことないです。」

新八も言った。

「私、もう帰らなきゃ。晋助に怒られる。」

露吞がそう言った。

「春樓。お前は露吞として生きてくのか？」

「うん。ツラや晋助、銀時たちと二人きりの時は春榎に戻るよ。その方が私もいいもん。」

露吞が言った。

「そうか。」

銀時が言った。

そして、何か悩んだ後言う。

「春榎……。顔貸して……。？」

「いいよ。」

露吞が笑顔で言った。

その様子を電柱の影で声をひそめてみる。

「本当にか？」

「うん。」

すると、銀時は露吞の体を引き寄せて唇に唇を重ねた。

それに露吞は抵抗しないで身を預けた。

その様子をあぜんと見る新八たち。

「あれってキスですよネィ。」

沖田がぽかんと言う。

「ああ……。？」

土方も呆然としている。

「春樹……。会えてうれしいよ……。」

銀時が幸せそうな笑顔で言った。

「私も嬉しい！銀時……。」

露舌はそう言い、銀時に抱きついた。

銀時も抱きしめる。

「銀さんってあんなことできるんですね……。」

新八が呟いた。

「銀時……。ありがとう。」

「こちらこそ……。」

銀時はそう言い、露舌を放した。

そして、露舌は背を向け歩き出した。

その後すぐ振り返り一言告げた。

「ねえ、銀時。お前らは恨まないのか……。この世界を恨まないのか。」

そう言い、去って行った。

「恨んでるよ、春樹。お前と高杉を裏の世界へ連れ込んだこの世界を……。先生を奪ったこの世界を……。」

銀時は静かな声で言った。

誰のも聞こえないほど小さな声で・・・。

「で、お前らはみるだけか？」

銀時に不意に言われ、新八たちは電柱の影から姿を現した。

「銀ちゃん。あの人斬り女。知り合いアルか？」

神楽が聞いた。

「あいつは人斬りじゃねえーよ。ま、斬っちゃったけど・・・。」

銀時が言った。

「どういう意味だ？つーか真選組の隊士を殺そうとしたんだよ。」

土方が怒りを含んだ声で言った。

「あいつは高杉の頼みなら何でも聞くって言いたいんですかイ？」

沖田が言った。

「半分正解。でも全部ってわけじゃねえーよ。あいつにとっては晋助は兄貴的な存在だから逆らうときは逆らうさ。」

銀時が言った。

「あいつとはどんな関係だ？あんなラブラブして・・・。」

土方が聞く。

「初恋の相手だよ……。露吞は……。俺の初恋の相手なんだよ。」

「初恋……。ならなんであすこまでイチャつける？」

土方が聞く。

「両思いなんだよ、いまだにな。俺は今も好きだ……。露吞のことが……。」

銀時が言った。

「そうか……。だがあの女は鬼兵隊。しかもいいところ身分だ。指名手配されんのは時間の問題だぞ。」

土方が言った。

「それはあいつも分かってるだろ……。それでも高杉のもとに居たいんだよ。それがあいつだよ。」

銀時が言った。

「じゃ、けーるぞ。新八、神楽。」

そして、そう言い家へと歩いて行った。

銀時は変わってない……。

私の大好きな銀時だ……。

今も恋の相手だ・・・。

ねえ、晋助。

昔に戻れるかな？

### 第三訓 初恋の相手（後書き）

どうでしたか？

銀さんが・・・で自分で思いました・・・。



#### 第四訓 散歩（前書き）

この話でも銀時が壊れます。

前話程でもありません。

#### 第四訓 散歩

「露吞っていう娘。指名手配にするもな……。」

真選組屯所では幹部たちが会議を行っている。  
そこへ……。

「すいませーん。」

女の声が聞こえた。

近藤たちが外へ出ると……。

女は刀を抜いた。

それにすぐ反応する土方と沖田。

「反応すんの早いな。さすがってとこだね。」

女は笑顔で言った。

「お前……あんときの……。」

土方が呟いた。

「そうだよ。芦咲 露吞。鬼兵隊の総統補佐です。」

女の声に土方たちが顔を曇らせた。

「ま、今日は仕事じゃないから。」

露吞は白の袴に白の上、それに紺色の丈の長い上着を着ている。

「仕事じゃないってどういう意味だ。」

土方が首をかしげる。

「銀時に聞きたいことがあって。で、銀時の居場所を教えて欲しいんだ。」

露吞が笑顔で言った。

「それは無理だぞ。」

土方が言った。

その声で真選組が露吞を囲んだ。

「あつ、やっぱり無理かあ。」

露吞はそう言い、堀に乗った。

「なんだ、そのジャンプ力……。」

土方が呟いた。

「攘夷戦争の時の愛称教えてあげる。私、破滅の副官って呼ばれてたんだから。晋助の右腕だよ、なめんなよ!」

露吞はそう告げ、走って行った。

「うーん。でも、どうしようかな?」

露吞はプラプラ歩いていると、目の前に「万事屋銀ちゃん」という店が・・・。

「可能性としてはあるよな・・・。」

露吞はそう呟き、階段を上って行った。  
そして、チャイムを押す。

ピンポン

「はい。」

眼鏡の男の子、新八が出た。

「あの、銀時居る？」

「あ、居ますよ。」

新八は奥に行き、銀時を呼んできた。

「なんだよ、新八。って、春榎・・・。」

銀時が呟いた。

「春榎じゃない露吞だよ。」

露吞が笑顔で言った。

「なんで居んの？」

「なんでって用があるから来たの。」

露吞が言った。

銀時は露吞を中に連れ込んだ。

「銀ちゃん。この子、この間のラブラブしてた子アルか？」

神楽が言った。

「そうだ・・・けど・・・。」

銀時が少しアワアワしていた。

「クスクス。銀時かわいい。」

露吞が言った。

「な、なんだよ・・・。」

銀時が頬を赤くして答えた。

「で、あの・・・。露吞さんは・・・高杉さんの右腕なんですか？」

新八が聞いた。

「そうだよ。そう、今日は晋助についてなんだよ。」

露吞が言った。

「あいつがどうした？」

銀時が聞いた。

「また散歩。河上に探してきてって言われちゃった。」

「高杉、本当に散歩好きだな。」

銀時が呟いた。

「今度、怪我したら殴ってやる。後説教だな。」

露吞が言った。

銀時が苦笑いをしている。

そこで、またチャイムが鳴った。

「万事屋！！そこに芦咲 露吞居るか？」

土方が言った。

「居るけど……。」

土方たちはその答えを聞きドアを打ち破った。

「あーらのー！！」

沖田が声を上げた。

「いきなりですか？」

露吞が呆れた声を出す。

「お前な……。またなんかやったのか？」

銀時が呆れ顔をしている。

「刀、持ち歩いてるだけだよ。」

「今、廃刀令だぞ。」

沖田が呟いた。

「きょう、スナック空いてるかな？」

近藤が言った。

「近藤さん、関係ないと思いますぜい。」

沖田が言った。

「姉御は仕事あるって言ってたアルヨ。」

「つーか、今日、何日だ？」

銀時が言った。

「えっと・・・8月10日です。」

新八が言った。

「あ~~~~~!!!!!!」

露吞が大きな声を出した。

「露吞？」

銀時が聞く。

「今日、晋助の誕生日だ……。」

露吞が言った。

「アイツ萩に居んのか……。」

銀時も呟いた。

「私、行ってくる。」

露吞はそう言い、走って行った。

「おい、春楨じゃなくて露吞……！」

銀時が言った。

「あつ、銀時ありがとつ。好きだよー……！」

露吞は一瞬振り返って、告げて、走って行った。

「銀ちゃん？」

神楽が銀時の方を見ると、頬を赤く染めていた。

「銀さん、おーい……！」

新八が大きな声で言うのとやっと普通に戻った。



「あ、おお・・・。」

銀時はあいまいな微笑みを見せた。

「で、あいつは・・・。」

土方が呟いた。

「高杉は・・・小さなころにある約束をしてんだよ・・・。大きく  
なったら誕生日に  
先生と酒を飲むという約束をな。」

銀時が呟いた。

そして、萩では・・・。

「晋助・・・。」

日が沈み始めている。

高杉は焼けている村塾の前に居た。

「・・・春榎か。」

高杉が呟いた。

「酒飲んでるの・・・?」

露舌が聞く。

「ああ．．．。約束したからな．．．．、先生と．．．。」

高杉が言った。

「そっか。」

露吞は一言そう言い隣に座った。

「あつ、鬼嫁．．．じゃん。」

露吞が呆然とした。

「いつもはな安物なんだけどよ、今年は20回忌だからな．．．。」

高杉が言った。

「そうだね．．．。」

「お前も飲むか？」

高杉が聞いた。

「うっん。これは晋助と先生がやるべきだよ。」

露吞が言った。

「なあ、春榎。」

「ん？」

「久しぶりにあすこいかねえーか。」

高杉が言った。

「いいよ。」

露吞も答えた。

そして、日が沈みきった時……。

「きれいだね……。」

「ああ……。」

二人は河川敷で星を見ている。

「昔もこうやってみたよね。」

「ああ……。先生と……ツラや銀時と……。」

高杉が言った。

「晋助……。今、ひとつ言う……。散歩言って怪我したら……殴るから。」

露吞が言った。

「なんで今言うんだ……。」

「別にいいじゃん。」

露吞が呟いた。

「お前は……。銀時が好きか？」

高杉が聞いた。

「うん。好きだよ……………」

露吞が言った。

「でも、私は晋助のそばに居たい。辰馬とも…………約束したし…………」

露吞が付け足すように言った。

「そうかよ……………」

「うん。」

銀時…………。

私はきつと銀時の横には居れない。

それが…………私の運命だと思う。

でも…………好きって言う気持ちは変わらない。

ねえ、銀時。

私は晋助の右腕として…………

頑張るよ…………。

晋助に恩を返すのが私のやること…………。

#### 第四訓 散歩（後書き）

どうでしたか？

ここで露吞の紹介

芦咲 露吞・・・25歳の160cm。

1月2日生まれ。

露吞は偽名で本名は芦咲 春榎。

仕事の時は敬語のお嬢様口調になる。

それ以外は男の子になる。

桂、銀時、晋助、辰馬と二人きりの時などは

春榎としている。

白の袴と白の上に丈の長い紺の上着を着ている。

攘夷戦争時代は高杉の上着なしに白の丈の長い上着を着ていた。

感想お願いします。

## 第五訓 商談

「あら、仕事サボついちゃうの？」

沖田が河川で昼寝をしていると、声が聞こえた。

沖田がアイマスクを外してみると・・・。

「芦咲・・・露吞・・・。」

沖田が呟いた。

露吞は赤色の着物を着ていた。

「クスクス。一番隊の隊長さんってお昼寝がお好きなのね。」

露吞は笑いながら言った。

「お前は何をしてるんでイ？」

沖田が聞いた。

「サボりよ。」

露吞は笑顔で言った。

「サボっていいんですかイ？」

「別にいいですよ。それに、今は自由時間ですよ。」

露吞が言った。

「自由時間？」

「ええ、そうよ。」

露吞が言った。

そこへ・・・。

「姉様～!!」

黄色の髪の子 来島 また子がやって来た。

「あら、また子。」

「ああ。幕府の狗、お前姉様に何してんスカ？」

また子が声を上げた。

そのまた子も桃色の着物を着ている。

「クスクス。また子、そんなじゃないわよ。お話していたの。」

露吞が笑顔で言った。

「白夜叉に怒られちゃうツスよ。」

また子が言った。

「クス。そうね。じゃあね、一番隊のおさばりさん。」

露吞がそう言い、去って行った。

「露吞ってよく分からない人ですねィ。」

沖田はそう呟いた。

そして、露吞とまた子は……。

「ここッスか？」

また子が言った。

「そうよ。」

二人がたどり着いたのはターミナルの船の場所。

「すいませーん。快援隊つてここにありますか？」

露吞が言った。

「いますき。」

そう言つてやつてきたのは笠をかぶった女の人だった。

「わしは陸奥じゃき。」

女の方はそう挨拶をした。

「私は芦咲 露吞といます。こちらが来島 また子です。」  
「こんにちはッス。」

また子が元気に挨拶をした。



「で、お求め物はなにがか？」  
「こちらのものです。」

露吞はそう言い、メモを渡した。

「じゃあ、今頭を呼んでくるき。」

陸奥はそう言い奥へと入って行つた。  
そして、奥から来たのは……。  
モジャモジャ頭の男だつた。

「なんじゃ。高杉のとこじゃなか。」

モジャモジャの男、坂本 辰馬が言つた。

「クスクス。そうなのよ。で、辰馬。そのメモのやつよろしくお願いできるかしら。」

「別にかまわんきに。って、えっ？」

辰馬が間拔けな声を出した。

「おんし、なぜわしの名を知つちゆうがか？」

また子と露吞が顔を見合わせた。

「辰馬……。私のことお忘れ？」

露吞が言つた。

辰馬はサングラスを押さえよく顔を見た。

「おんし……。春樹がか？」

辰馬が聞く。

露吞がコクっとうなずいた。

「今は芦咲 露吞って言うのよ。鬼兵隊の総統補佐ですよ。」  
「白夜叉とはラブラブスよ。」

また子が言った。

「また子。余計な事言わないいのよ。」

露吞は頬を染めて言った。

「アハハハハ。金時とは相変わらずがか。」

「辰馬もからかわないでくださいます。」

露吞が言った。

「で、何に使うがか？銃の弾なんか。」

辰馬が聞く。

「これは、また子のなのよ。拳銃使いですので……。」  
「そうッス。」

また子が元気よく言った。

「ねえ、また子。二人にしてくださいます？」

露吞が言った。

「いいッスよ。」

また子はそう言い、部屋から出て行った。

「ねえ、辰馬。これは事実じゃないんだけど……。今ねある噂が流れてるの。」

「噂がか？」

辰馬が聞いた。

「うん。晋助も知ってるんだけどね今日はそのことも言いに来たの。」

露吞が言った。

「一体何がか？」

「六鬼神を狙ってる攘夷志士が居るらしいの……。」

露吞が言ったら辰馬が顔を曇らせた。

「晋助がね……。辰馬に伝えておけて。」

「なぜわしに？」

辰馬が聞く。

「私と銀時それに、龍銀は名前がばれてないから辰馬やヅラには言った方がいいってことらしい……。」「  
「そうがか。」

辰馬が呟いた。

「私、もう行くね。辰馬・・・気をつけてよ・・・。」  
「分かったき。」

露吞は辰馬を背に歩いて行つた。

辰馬・・・。

私は辰馬との約束護るよ・・・。

そのために、私にできることをやる。

## 第五訓 商談（後書き）

どうでしたか？

辰馬と露吞の出会いでした。

感想お願いします。

## 第六訓 心配事

「ただいま。」

露吞が鬼兵隊の船へ戻ってきた。

「お帰りでございます。」

河上が言った。

「晋助はどこ？」

露吞が聞く。

「晋助なら甲板でござろう。」

河上が言った。

「分かったよ。」

露吞はそう言い、甲板へと出て行った。

「晋助、今戻ったよ。」

「そうか……。」

いつも道理冷たい声が聞こえた。

「ヅラの方はどうだった？喧嘩してない？」

「ククク……。ヅラにはうまく言えた。運よく銀時にも言えた

ぜ。」

高杉が言った。

「いいなー。銀時にも会えたんだ。こっちなんか辰馬私のこと忘れてたよ。」

露吞が呆れたように言った。

「ククク。あいつは相変わらずだな。」  
「クスクス。そうだね。」

露吞が笑った。

その後、沈黙が続いた。

「ねえ、晋助。」  
「なんだ？」

高杉が聞き返す。

「なんで今頃六鬼神なんか・・・集めるのかな？」  
「知らねーよ。」

高杉が無愛想に言った。

「龍銀、何を思って生きてるのかな？どこにいるのかな？」

露吞が静かな声で聞いた。

「俺も知らないよ・・・。」

高杉が呟いた。  
また沈黙が続いた。

「俺らも中に入るか？」  
「うん。」

露吞は頷き、高杉の後について行った。

一方、銀時と桂は・・・。

「高杉がなにを言うと思えば六鬼神をな・・・。」

居酒屋で桂が呟いた。  
いつも道理変装をしている。

「その野郎何をやる気なんだ？」  
「わけのわからない攘夷志士だ。俺らを集めて何になる。」

桂も銀時もいつもより真面目な顔をしている。

「龍銀、何をしてるかな？」  
「さあーな。俺のもそんなことあかんねーよ。」

銀時がぶつきらぼくに言ったがどこか心配してるような声だった。

「じゃあ、そろそろやめにしないか。もう酔ってきた。」

桂が言った。



「そうだな。」

銀時もそう言い二人は居酒屋を後にした。  
別れ際、銀時が言う。

「オメーの事だから心配はしねーが気をつけろよ。」  
「フン。貴様もな。」

桂が言つて二人は別れた。

そして、かぶき町から離れた萩では・・・。

「六鬼神をねえー。そんなことしてなににんのか・・・。」

一人の青年が呟いていた。

「ま、兄貴の事だから平気かな？平気じゃないか・・・。」

青年の髪は綺麗な銀髪だった。

「かぶき町に行つてみるか・・・。」

青年はそう呟き闇へと消えていった。

## 第六訓 心配事（後書き）

どうでしたか？

この物語では高杉率いる鬼兵隊は微妙なところです。

大体は仲間・・・。

そして、活動報告にてアンケート実施中。

感想お願いします。

## 第七訓 喧嘩するほど仲がいい（前書き）

銀さんたちの子供時代です。

## 第七訓 喧嘩するほど仲がいい

『晋助！！お・き・ろ！！』

朝から晋助の部屋では春榎が声を上げる。

『なんだよ？春榎。』

『なんだよじゃないよ。早くしないとご飯なくなっちゃうよ。』

春榎が呆れたように言った。

『もお。分かった。』

晋助はやつと布団から起きだした。

『おはよう、晋助。』

朝から笑顔で松陽先生が言った。

『おはよう。』

銀時たちも笑顔で言った。

『おはよー。銀時、ツラ、龍銀。りゅうぎ。』

晋助もまだ眠そうだ。

『晋助はほんと！朝に弱い！！』

春榎が元気よく言った。

『それはオメーが強いだけだろ……。』

晋助は眼を擦りながら言った。

『そうかもね。』

銀時が言った。

春榎も頬を膨らませて反抗した。

『なによ、銀時。私に対しての嫌味？』  
『そんなんじゃないよ！！』

銀時が言った。

『本当に？』  
『本当だって。』

二人は口げんかになりそうになる。  
それを、松陽先生が止めた。

『春榎、銀時。いい加減にしなさい。晋助、顔を洗っておいで。』  
『はい。』

子供たちが元気よく返事をした。

『じゃあ、ご飯にしますよ。』  
『はい！』

この日の朝ごはんはご飯と煮物。  
煮物は先生の得意料理。

というか煮物しか得意じゃない。  
一応、他のも作れるけど……。

『やっぱ先生のはおいしい。』

晋助が笑顔で言った。

ご飯を食べた後は塾である。

塾では松陽先生が遺伝子がどうのこうのと言っている。

その授業を真剣に聞いている小太郎。

先生ばかり見ている晋助。

居眠りしている銀時。

銀時につんつんしている龍銀。

銀時ばかり見ている春樹。

『今日の授業ちゃんと聞いていたか？』

授業が終わってから小太郎が銀時に聞いた。

『聞いてた、聞いてた。あの遺伝子がどうのこうのってのだから？』

銀時が言った。

『嘘だよ。兄ちゃん寝てたもん。』

そこで、龍銀がチクった。

『はあ、やっぱりか。』

小太郎が呆れ顔で言っている。

『先生の授業は子守唄かよ。』

晋助が呟いた。

『銀時にとってはなんでも子守唄だよ。』

春樹が呆れるように言った。

『なんだよ、みんなそろって。俺に嫌味とかあんのかよ!』

銀時が言った。

『別に!』

春樹が言った。

また二人が口げんかになりそうになる。

『喧嘩すんなよ。』

小太郎が言った。

『ヅラは黙れ。』

春樹が言った。

『そうだ、ヅラにや関係ねえーよ。』

『俺って一体何だ？』

小太郎が晋助に聞いた。

『ヅラをかぶってる人。』

晋助があっさり言った。

『俺のは地毛だ！』

小太郎が怒鳴り晋助に飛んだ。

ゴッソ。

『いつてえー！！』

晋助が声を上げた。

『フン。さっきのは晋助が悪い！！』

『かんぺきにヅラが悪いだろ！！』

晋助が怒鳴った。

『晋助、兄ちゃん、ヅラも春榎も、やめなつて！！』

龍銀が止めに入った。

それにより喧嘩は特大サイズになった。

『春榎のバカ！！』

『銀時の間抜け！！』



『晋助は人の気持ちを考えてないから痛い目にあうんだ!!』

『なんだよ。このツラ!!』

『いい加減にしろよ、お前らあ!!』

喧嘩は夕方まで続いたとさ。

## 第七訓 喧嘩するほど仲がいい（後書き）

どうでしたか？

ちっちゃい頃の銀さんもヅラもかわいいですね。

・  
ヅラは優等生からなにがあったら妄想全開キャラになるんだろう・

感想お願いします

## 第八訓 仲直り

「はあ。」

「5回目……。」

鬼兵隊の甲板で露吞と晋助が並んで座っていた。

「数えてたの？」

「ああ。5回分の幸せが逃げたぞ……。」

晋助が言った。

「そんなことないよ。私は幸せがいっぱいだよ。」

露吞が膨れて言った。

「そうかよ……。で、なんでため息をついてんだ？」

晋助が聞く。

「六鬼神のことについてね……。」

「そうか……。」

晋助が呟いた。

「私は……、何ができるのかな？」

露吞が呟いた。

「お前はお前にしかできねえー事があるんじゃないのか？」

晋助が言った。

「えっ？」

「お前は俺の支えでもあり、銀時の彼女でもあんだぜ。俺らをつなぎ止めんことができるのはお前しかないんだよ。」

晋助が言った。

「晋助は銀時たちと仲直りしたいの？」

露吞が聞く。

「さあーな。したいのかもな・・・、お前にそんなこと言うなんて」

晋助が呟いた。

「クスクス。晋助は子供だね。」

「どういうことだよ？」

晋助は頬を膨らませた。

「そついうところが子供。」

露吞が笑いながら言った。

「お前だって膨らませるだろ？」

晋助が言った。

「そうだけど・・・なんていうか・・・、晋助が子供に見える。女の母性本能ってやつかな？」

露吞が笑顔で言った。

「母性本能ねえ・・・。」

晋助が呟いた。

「だから、私のもとから離れないでね。」  
「ククク。銀時が泣くぞ。」

晋助が言った。

「恋愛感情じゃないよ。それに、晋助に恋愛感情は抱かない。」

露吞が言った。

「ひでえーな。」  
「そうかなあ？」

露吞が笑顔で言った。

銀時、ツラ。

もしかしたら、昔に戻れるかも・・・。

晋助の魂はまだそこにあるんだよ。

村塾に、攘夷戦争の時に・・・。

だから・・・。

私は、晋助をそばで支える。

また、みんなで笑えるように・・・。

## 第八訓 仲直り（後書き）

どうでしたか？

感想をお願いします。

## 第九訓 会議（前書き）

この話でオリキャラ龍銀の詳しいことが分かりますよ。



## 第九訓 会議

「ふあゝ。暇……。」

露吞が暇そうに歩いている。

「春榎。」

「ん？ってヅラ。」

露吞が言った。

「ヅラじゃない、桂だ。」

「いい加減あきらめたら？」

露吞が呆れたように言う。

「それは、どうでもいいんだ。晋助にひとつ伝言を頼む。」

桂が言った。

「伝言？」

露吞が不思議そうに首をかしげた。

「ああ。明日、万事屋銀ちゃんで会議を開くってよ。」

「万事屋銀ちゃん？ああ、銀時のところね。でも、会議って？」

露吞が聞く。

「六鬼神のあの事が本当っぽいんだ。その会議だ。」

桂が言った。

「本当なんだ。分かった。言ってみるよ、どんな反応するか分からないけど・・・。」

露吞が言った。

「ああ、頼む。」

桂はそう言い去って行った。

「六鬼神だとお？」

真選組の真選組の屯所で土方が声を上げた。

「あっはい。最近攘夷浪士の動きが怪しかったんで調べたら六鬼神という名前が出てきたんです。」

山崎が説明する。

「トシ。あす、総悟と俺らで緊急会議を行う。」

「はい!!」

「銀さん。今日誰か来るんですか？」

次の日の朝。  
新八が聞いた。

「ああ。ツラと辰馬、あとはその他もろもろ。」

銀時がだるそう言った。

「その他って誰ですか？」  
「すぐわかんぞ。」

銀時が言った。

「邪魔するぞ。」

桂が入ってきた。

「桂さん。」

その後ろからは・・・。

「アハハハハハ。邪魔するぜよ。」

「坂本さん。」

「なんでもっさんが居るアルカ？」

神楽が聞いた。

「いやー。わしも良く分かんぜよ。」

辰馬が笑顔で言った。

「あつ。辰馬たちもう来てたの?」

さらにその後ろから女の声が聞こえた。

「ククク。次会ったらぶつた斬るんじゃないのかア? 銀時にツラ。」

女の後ろからは冷たい声がした。

「高杉、春瓊。」

銀時が呟いた。

「一時休戦だ。以上事態だからな。」

桂が言った。

「ククク。違いねえ。」

高杉が呟いた。

「さあーで。会議といきましょつか。」

露吞が笑顔で言った。

「ああ。」

そして、真選組の屯所では・・・。

「会議するって言ったて六鬼神が誰か分からないんですぜイ？」

沖田が言った。

「まあ、それはあるが・・・。」

土方が呟いた。

「攘夷時代活躍した人なので可能性としては旦那、高杉、桂。そして、坂本辰馬だと思いますが・・・。」

山崎が呟いた。

「俺が教えてやろーか？幕府の狗よお。」

窓側から冷たい声がした。

高杉よりも少し高い声で・・・。

真選組が振り返るとそこに居たのは・・・。

「高杉・・・？それとも旦那ですかイ？」

沖田が言った。

「残念どつちもハ・ズ・レ。」

声の主は楽しそうな声で言った。

声の主は銀髪の上に薄い青の眼、髪はストレートでポニーテールにしている。

なにより、死んだ魚の眼・・・。

「まあ、間違うのも当たり前だよねえ。」

この青年はニコニコしながら言った。

「で、六鬼神について知りたいんでしょう？取引しない？」

青年はとても楽しそうに言った。

「取引だと？」

土方が目を細めた。

「そう。お前らが坂田 銀時の居場所に案内してくれたら俺が六鬼神について教えてやるよお。どうする？」

青年はニヤつとしながら言った。

「本当に教えてくれんだよな？」

土方が言った。

「ああ。侍に二言はねえー。」

青年はにっこりしながら言った。

「じゃあ、ついてこい。」

青年が土方たちに案内されたのは万事屋銀ちゃん。

「ここだ。」

土方はそう言うと、強引にドアを開けた。  
玄関にはたくさんの靴が並べてあった。

「来訪中か？」

土方が言った。

青年は奥から聞こえる声に耳をすませた。  
そして、息を呑む。

（ヤベッ。）

土方たちは断りもなくあっさりと奥のドアを開けた。  
そして、眼を見開く。

「おいおい。多串くん、チャイムも鳴らさないのかい？」

銀時が呆れながら言った。

「万事屋こいつぁどういうことだ？」

土方が言った。

「いやそれはな、っておわっ！」

銀時の言葉を何かが遮った。

銀時がかわしたものを高杉がキャッチした。

「こいつぁ。」

高杉の手に握られてたのは十手だった。

それを見て銀時も目を丸くしている。

そして、飛んできた方に目を向けた。

「龍銀……。」

銀時が呟いた。

「やっぱり兄貴は兄貴だなぁ……。俺のことちゃんと覚えてくれた。」

青年は笑顔で言った。

「覚えてるに決まってるだろ？この世でただ一人の血のつながった兄弟だからな。」

銀時が言った。

「ブラコンが……。」

高杉が後ろで呟いた。

「誰がブラコンなんだ？ちび助。」

銀時が挑発するように言った。



「なんだとこの天パやろーが。」

高杉が言った。

「つーか、兄貴の天パは相変わらずだねえー。」

「お前は分かんねえーだろーが。天パは大変なんだぞ。」

銀時が言った。

「分かんないよ。だって俺、ストレートだもんね。」

その様子を呆然と見る新八に神楽。  
そして、真選組の人たち。

「おい。お前、一体誰なんだよ?」

土方が言った。

「ああ、言ってなかったつけ?俺は坂田 龍銀。りゅうぎん 銀時の血のつながった弟だよ。似てるだろ?」

龍銀が笑顔で言った。

沖田がよく見る。

「ホントですぜい。死んだ目や銀髪とか……。眼の色は違っんですねい。」

土方が呆然として見ている。

「つーか、お前らなあー。会議の邪魔してんじゃねえーよ。」

銀時が言った。

「悪い……。で、六鬼神ってなんなんだ？」

土方が聞いた。

「もう前に居るじゃねえーかよ。」

龍銀が言った。

「は？」

土方たちが間抜けな声を出す。

「だ・か・ら。前に居るじゃねえーか。」

「どういう意味ですかイ？」

沖田が聞く。

「つまりよ『おい、言っていいのか？』あ？別にいいんじゃない？」

龍銀の声を桂が遮った。

「まあーな。いつかはばれることだしな。」

高杉が言った。

「そついうの気にすんのはヅラだけだよ。」

春榎が言った。

「ヅラはヅラってことだな。」

銀時が呟いた。

「お前ら俺に恨みでもあんのか？」

桂が聞く。

「ある！！」

全員がそろって言った。

「俺って何？」

「とにかく、俺はその幕府の狗と取引やったの」

龍銀が言った。

「お前が言いたきゃ言えばいい。」

銀時が言った。

その後、龍銀の方を見て、ニヤツと笑った。

「じゃ、言っちゃう。六鬼神つーのはここに居る俺、兄貴、春榎、晋助、辰馬にヅラ。この6人が六鬼神なんだよ。」

龍銀が言った。

「えっ？銀さん本当ですか？」

「銀ちゃん、昔の有名人アルか？」

「旦那。マジですかイ。」

3人が一斉に聞いた。

「お前ら、俺は聖徳太子じゃねえーんだけど・・・。」

銀時がダルそうに言った。

「全部ホントのことだよ。ならば証拠でも見せるか？」

龍銀は呟き、銀時たちの方を見てニヤツと笑った。

銀時たちは全員うなずいた。

そして、懷から一つの鉢巻を取り出した。

「ククク。お前でも持ってたのかよ。銀時イ。」

「当たり前だ。御守りみたいなものだかな。」

銀時と高杉が笑いあう。

「これ、六鬼神の証。」

龍銀はそう言い、自分のを見せた。

鉢巻には字が書いてあった。

『俺らは六人でひとつ』と・・・。

「てか、辰馬も懷に入れてたんだ。」

露吞が言った。

「アハハハハ。以外がか？ま、金時の言うように御守りみたいなものじゃからの。」

辰馬が言った。

「おい、辰馬。何回言ったらお前は理解すんだ？俺は銀時だって言っただろーが。」

銀時が怒り混じりに言った。

「アハハハハハ。今度からは気をつけるき。」

辰馬が笑い顔で言った。

「で、お前ら真選組はどうすんの？ここに攘夷志士が3人は居るしよ。ま、捕まえてもいいんだぜ？」

銀時が挑発するように言った。

「それは……。」

土方が口ごもる。

「幕府の狗のくせによ……。」

龍銀が呟いた。

「オメーが一番、攘夷志士ばいすぜい。」

沖田が言った。

「えっ？高杉の方が攘夷志士のオーラ出しまくってるけどな。」

龍銀がなんで？という顔で言った。

「俺のどこがオーラ出してんだ？」

高杉が言った。

「その顔からそう思っけど……。」

龍銀が言った。

「お前な……。昔から全然変わってねえーな。」

高杉が言った。

「それが、俺のとりえだかな。」

龍銀がニヤツと笑いながら言った。

そんな中、土方が口を開いた。

「少し考えさせる。」

「悪いが……。俺らにも時間がねえーんだ。」

銀時が言った。

真選組が驚いた顔をしている。

「ここまで六鬼神の話が広まってる……俺らの周りがあぶねえ・

・・。」

銀時が顔を下に向けながら言った。

「銀さん……。」

「銀ちゃん……。」

新八と神楽が心配そうな顔をしている。

「お前らが心配することなんてねえーよ。」

銀時が二人の頭に手を置いた。

「ま、ともかく。今日はここらでお開きにしねえーか？」

銀時が言った。

「じゃ、俺はここに居候させてもらうな。いいだろ？ 兄貴。」

龍銀が言った。

「別にいいよ。勝手にしろ。」

銀時が言った。

「じゃあ、真選組さつさと帰れ。ヅラに高杉たちもだぞー。」

銀時が居た人たちを帰らせる。

「じゃーな、銀時。」

桂たちがそう言い、帰って行った。

「な、兄貴。もう俺らを置いてくなよ。」

龍銀が銀時に向けて呟いた。

「ああ。分かってるよ……。」

兄貴……。

俺は、兄貴が大好きだ。

俺は、俺の大事な人をどんな手を使ってでも護る。

それが、俺の武士道だ。



## 第九訓 会議（後書き）

どうでしたか？

個人的に龍銀は高杉と銀時の間くらいの性格にしたいと思います。

感想お願いします。

## 第十訓 怪我（前書き）

高杉が壊れてる・・・きがする・・・。

## 第十訓 怪我

「ククク。あのヤローは何も変わってなんかいねえーな。」

万事屋からの帰り道、高杉と露吞が並んで歩いていた。

「クスクス。男なんか変わんないのが一番いいんだよ。」

露吞が笑いながら言った。

「アイツの武士道も変わってねえーのかな。人を殺してでも大事なものを護るというその歪んだ愛情による武士道がよ。」

高杉が呟いた。

「変わってないと思うよ。昔から頑固だもん、あいつは……。」

露吞が言った。

「そっぴや、ツラと銀時。晋助に向かってぶった斬る宣言してたんだ……。」

露吞が呟いた。

「ああ。紅桜の時にな……。」

高杉が言った。

「紅桜かあゝ。あん時は私は別行動だったから良く分かんないけど

さあ……。晋助さ  
怪我したよね……。」

露吞が呆れたように言った。

「お前にとことん怒られたことしか覚えてねえーよ。」

紅桜の事件の直後。

『晋助！お前バカだろ。バカの中のバカだろ。』

露吞の声が響いた。

『いや……。それは……。』

高杉が口ごもる。

『言い訳は聞かないよ。全治1週間。もし、教本がなかったら死んでたかも知れないんだよ。』

露吞が怒った口調で言った。

『だから、それはな……。』

『言い訳は聞かねえ言ってるんだろ！！』

露吞が壁を殴る。

『なんで、俺が怒られるんだ……。』

高杉が呟いた。

『なんか言った？』

露吞が言った。

高杉が顔をこわばらせる。

『イヤ何も言つてねえ……。』

高杉が言った。

『大体、また子も武市も大怪我なんだよ。誰のせい？』

露吞が言った。

『俺のせいじゃねえ。それは、岡田の……。』

高杉が言った。

『ま、それはいいよ。だけど、晋助。銀時に何やった？』

露吞の眼には怒りがしつかりと含まれていた。

『俺は銀時はやってないからな……。そこんとこ勘違いすんじゃねえーよ。』

『分かつてるけどよ。ま、いつか。』

露吞が言った。

『諦めんの早いな．．．。』

高杉が呟いた。

『でもね．．．。次、銀時に何かやったら．．．私が許さないよ。』

露呑の眼は真剣だった。

「そんなことあつたな．．．。」

高杉が呟いた。

紅桜。

その一件から晋助と銀時たちの溝が深まってしまった．．．。

でも、それでも．．．。

元に戻る日が来る．．．。

私はそう信じるよ．．．．．。



第十訓 怪我（後書き）

どうでしたか？

感想をお願いします



## 第十一訓 温泉（上）（前書き）

温泉の話です。

神威と神楽は微妙に仲がいい設定です

## 第十一訓 温泉（上）

「銀さん……。帰りましょう……。……。」

新八が言った。

新八と銀時、神楽、九ちゃん、お妙、龍銀は温泉に来ていた。男の脱衣所に入った瞬間、新八たちは後悔した。脱衣所に居たのは……。

「貴様らまで来ていたのか。」

「久しぶりに温泉来たつーのに見知った人だらけじゃねえーか……。」「」

「お兄さんも温泉くるんだ。」

「銀時殿は誰の肌身を見に来たんですか？」

「俺らは違うからね。慰安温泉だからな。」

「指名手配犯にあつてるがな……。」「

「土方さん。俺らも少しの間休戦にしようとかいったじゃねえですかイ。」「

「アハハハハハ。金時も龍金も温泉がか？」

桂、高杉、神威、東城、近藤、土方、沖田、山崎、辰馬だった。

「金時じゃない、銀時だつってんじゃないか。」

「龍金って誰のことだー!!」「

銀時と龍銀が同時に言った。

「てか、皆さんそろって何やってんですか？」

新八が聞く。

「俺はお湯につかうと思ってな、新八君。」

「俺は神威がきてよ温泉いきてえー言うから……。」

「私は若の付き添いです。」

「わしは陸奥を引き連れてのー。」

桂、高杉、東城、辰馬が言った。

女子風呂では……。

「あ、むつちに露吞!！」

神楽が言った。

「神楽。」

「銀時のところ……。」

陸奥と露吞が言った。

「あら？神楽ちゃん知り合い？」

お妙が聞く。

「そうネ。むつちがもつさんとこの副官アル。で、露吞が銀ちゃんの彼女ネ。」

神楽が言った。

「彼女なんて大げさよ。」

露吞が頬を赤くしながら言った。

そして、男子風呂では……。

「貴様、その傷どうした？」

桂が銀時に言った。

「ああ。これか？これは……あつ似蔵と殺り合った時のな……。

」

銀時はそう言い高杉の方を見た。

「俺のせいじゃねえーから！」

高杉が言った。

「アハハハハ。ツラもどうした？」

辰馬が桂の傷を指さしながら言った。

「これは……岡田にな……。」

桂も高杉の方を見た。

「俺のせいじゃねえーからな．．．。」

高杉が言った。

「晋助。その腹の傷どうしたの？」

龍銀が聞いた。

「これはヅラがな。」

高杉が桂を睨みながら言った。

「．．．．悪かった．．．。」

桂が静かに言った。

「大体このせいで春榎にメツチャ怒られたんだけど．．．。」

高杉が呟いた。

「ドンマイだ．．．。」

龍銀が言った。

でも、そんななか真選組の人たちの眼を集めたのは高杉の左目だった。

いつもは包帯で隠している左目は深そうな傷があった。

「貴様、左目を出した方がカリスマ性があるぞ。」

桂が言った。

「俺もそう思うがな・・・春榎を傷つけたくねえーからよ・・・。」

高杉が言った。

かなしそうに・・・。

「神威だっけ。お前、肌白いな・・・。」

沖田が神威の肌を見て言った。

「夜兎の特徴だからね。」

笑顔で言った。

女子風呂では・・・。

「むっちって髪の毛サラサラアルナ。露呑もネ。」

神楽が楽しそうに言った。

「神楽ちゃんだっけ？」

「そうアル。」

神楽が元気に答えた。

「神楽ちゃんもいい髪してるよ。」

露呑が神楽の髪を見ながら言った。

「今日ね、神楽ちゃんに似ている子も一緒に来ているの。」

露吞が言った。

「名前なんて言うアルカ？」

神楽が聞いた。

「神威だっけ？」

露吞が言った。

神楽が下を向いた。

「そいつ・・・私の兄貴ネ。」

「へえー。似てるのも当たり前ね。龍銀と銀時みたいね。」

露吞が笑いながら言った。

「私たちそんなに仲良くないアルヨ。」

神楽が言った。

「そうなの？神威は気にしてるみたいけど・・・。」

「えっ？」

露吞の声に神楽が声を上げた。

「兄妹ってそういうものなんだよ。」

露吞が笑って言った。

「わしら露天風呂に行ってくるき。」

陸奥が言った。

「私たちも行く。」

露吞と神楽もついて行った。

「やっぱり露天風呂つつたらのぞきだよな……。」

近藤が言った。

「私は違います。若を護るためです。」

東城が言った。

「俺は違うよ。春榎の肌身何か見たくねえーからな。」

そう言う銀時の頬が赤かった。

「わしは女なら誰でもいいき。」

辰馬が言った。

「兄貴たちバカだよな。春榎に殴られるちゃうつーの。」



龍銀が呆れるように言った。

「俺が先に見るんだ。」

近藤が言った。

「若の裸を見ることは私が許しません。私ならいいですが……。」

東城が言った。

「何私情を持ちこんでんだ？」

「そうぜよ。」

辰馬と銀時が同時に言った。

そうなって争っているところに桶が飛んできた。

「ぐはっ。」

桶は近藤に直撃。

「げっ……。」

他の3人が声を上げた。

「東城、貴様何をやっているんだ。」

九ちゃんが声を上げた。

「銀時のバカア!!」

露呑の声が響いた。

「頭。おまんなにしちゅうがか？」

陸奥が怒っている口調で言った。

「近藤さん、いい加減にしてください。」

お妙が言った。

「出たら覚えておけよ!!」

女全員が言った。

銀時たちは顔を曇らせた。

## 第十一訓 温泉（上）（後書き）

どうでしたか？

感想をお願いします

## 第十二訓 温泉（下）

「痛い……。。」

温泉を入り終わった後、銀時が呟いた。

「銀時が悪いの!!」

露吞が言った。

「だからと言って殴ることはなくね？」

銀時が呟いた。

「変態は女の敵だね？神楽ちゃん。」

「はいアル。」

神楽が元気よく答えた。

「お前らいつから仲良くなっただんだ？」

高杉が聞く。

「女の子はすぐ仲良くなるのよ。」

露吞が元気よく言った。

「女ってすげえーな……。。」

龍銀が呟いた。

「そつだ。ねえ銀時、今日私と晋助泊っていい？」

露吞が明るく聞いた。

「いきなりかよ。つーか、お前らいいとこ身分じゃねえーか。そんな奴が人のとこに泊っていいのかよ？」

銀時が聞いた。

「いいとこ身分って？」

露吞が聞いた。

「お前ら……。高杉は鬼兵隊の総統だしよ、春樹は総統補佐……。そんな奴らが、船をでたらいけなくねえーか？」

「別にいいの！！大体また子も河上も一人でやっていけるから。」

露吞が元気よく言った。

「それに、たまには銀時と酒飲みたい！！」

露吞は付け加えるように言った。

「仕方ねえーな。ソラも辰馬も来るか？今から万事屋で飲み会だ。」

銀時が言った。

「わしは行くぜよ。」

「俺もだ。」

辰馬と桂が言った。

## 第十二訓 温泉（下）（後書き）

どうでしたか？

次回は飲み会篇です

参加するのは銀時、桂、辰馬、高杉、龍銀、露吞、神威、陸奥、神楽  
新八、沖田、土方。

近藤さんは多分出さないと思うな・・・。

感想お願いします

### 第十三訓 飲み会（前書き）

銀さんが壊れます・・・。



### 第十三訓 飲み会

「じゃあ、飲み会始めんつぞ。」

銀時が言った。

「よっしゃ。乾杯!!」

「乾杯!!」

グビグビ。

「うめえー。」

土方が言った。

「やっぱり酒ですねい。」

沖田が頬を赤く染めて言った。

「お前未成年じゃないアルカ？」

神楽が聞く。

「そうですぜい。」

「飲んだダメじゃないアルカ。」

神楽が言った。

その隣で・・・。

「日本酒というのはおいしいね。地球はおいしいものがいっぱいだな。ヒック。」

「兄貴……。兄貴も未成年アルヨ。」

神楽が呆れたように言った。

「お酒に歳なんか必要ないよ。ヒック。」

神威が言った。

短時間で酔いまくっている。

「神威。お前酒に弱いだろ……。」

高杉が呟いた。

「だ、大丈夫。ヒック……。」

神威は頬がだいぶ赤くなっていた。

「龍銀なみだな……。おい、龍銀は飲んでないよな？」

銀時が聞く。

「飲んでないって。ヒック。お酒なんか飲んだって、俺の場合いいことはないから、ヒック。」

龍銀が言った。

「貴様……。飲んだだろ。」

桂が呆れたように言った。

「のんでないってつってんだろ？ヅラ、ヒック。」

「ヅラじゃない、桂だ。」

「昔からホント龍銀は酒に弱いね・・・。」

露吞が呟いた。

「ククク。お前も人のこと言えないだろ・・・。」

高杉が呟いた。

「大丈夫。飲んでないから。」

露吞が笑顔で言った。

「アハハハハ。酒って、ヒック。おいしいぜよ、ヒック。」

辰馬が言った。

「・・・。お前ら・・・酒に弱いな・・・。」

土方が呟いた。

「俺と高杉は酒には酔わない派だが・・・。」

桂が言った。

「じゃあ、旦那は酔うんですかい？ヒック。」

沖田が聞く。

「ああ。酒に弱い方だぞ。な、リーダー、新八君。」

桂が言った。

「はい。」

「はいアル。」

新八と神楽が元気よく答えた。

「兄弟そろってということだよ・・・ヒック。」

龍銀が言った。

「ヒック、まあ。そういうことだ・・・ヒック。」

銀時が言った。

「おいー酒持ってこいよ。あん？」

龍銀が言った。

「みんないい加減にして！！ぶん殴るぞ、オラ。」

露吞が言った。

「はい！！！」

その一言で全員が静かになった。

その後はというと・・・。

「俺、もうダメ。」

龍銀が横になっている。

「坂本、起きるぜよ。いつまで寝るのか？」

陸奥が寝ている坂本を揺さぶる。

「俺らはそろそろ帰る。後のこと頼んだぜ。」

土方がそう言い、万事屋を後にした。  
その後ろに沖田が続く。

「じゃあ、寝るか？」

桂がそう言い、横になった。  
龍銀はもうすでに熟睡中。

「高杉、起きてるか？」

桂が聞く。

「クークー。」

高杉は寝息を立てていた。

「はあ、熟睡かよ。」

桂はそう言い、眼を閉じた。

「春榎。起きてるか？」

「起きてるよ……。」

起きているのは銀時と露吞だけだった。

「なあ……顔貸して……。」

銀時が言った。

「また？でもいいけど……。」

露吞が頬を染めて言った。

「そっか……。」

銀時はそう言い、体を近づけようとした。

「待つて。いつも銀時からやってるから今日は私からやる。」

露吞が言い、銀時の体に近づき唇に唇をくっつけた。

「おい、お前積極的だな。」

銀時が言った。

「それは銀時も一緒だよ。」

露吞が頬を染めて言った。

「みーちゃった。」

龍銀の声がした。

「やっぱふたりは付き合っているアルナ。」

神楽が言った。

「神楽ちゃん。銀さんだって彼女ぐらい居るんですよ。」

新八が言った。

「お前ら・・・起きてたな・・・。」

銀時が言った。

「お前らは昔から変わらねえーな。」

龍銀が言った。

「龍銀！盗み聞きなんてひどーい！！！」

露吞が言った。

「もう夜アルヨ。銀ちゃんも露吞も早く寝るアル。」

神楽が言った。

「そだな。俺らも寝るか・・・。」

銀時はそう言い、横になった。  
神楽も露呑も龍銀も新八も横になった。

やっぱり。

私は銀時が好き！！



### 第十三訓 飲み会（後書き）

どうでしたか？

キスシーンって書くのが難しい。

感想お願いします。

## 第十四訓 子供の元攘夷志士（前書き）

オリキャラ3人目が出ます。

#### 第十四訓 子供の元攘夷志士

『銀・・・？』

『すまねえ・・・。俺はお前らを護ってやる自信がねえ・・・。』

どんどう遠くなつてく銀の背中を見ながら俺は叫んだ。

『銀の嘘つきイ！！』

俺の声はそらに空しく響いた。

「１０年ぶりかな？」

青年はそう言い、かぶき町を歩いていた。

「銀の居場所は確か万事屋銀ちゃんだったかな？」

青年はそう呟きながら道を歩いていた。

青年の髪は赤く、眼の色は綺麗な紫色をしていた。

「あつ、ここだ。」

青年はそう言い階段を上がって行った。

ピンポン

「はい。」

新八が扉を開ける。

「あつと．．．．ここに坂田 銀時って人はいますかい？」

青年はぺこりとお辞儀をして言った。

「いるけど．．．．熟睡中。昨日、銀さんの幼馴染が来て飲み会をやったから。」

（幼馴染？まさかね．．．．）

「新八君。来客か？」

「ククク。ちゃんと依頼来てんじゃねーか．．．．」

「そんな言い方ないでしょ。」

「アハハハハ。おまんは相変わらず厳しいのー。」

「恐いのも変わってないからな．．．．」

奥から5人の声が聞こえた。

「入っていいですよ。」

新八が言った。

「あ、はい．．．．」

新八についていき中へ入った青年は部屋に着いたときには飛びこんでいた。

「うおつ。」

桂が声を上げた。

青年は眼から涙をこぼしていた。

「ヅラ、晋助……。春榎にたっちゃん……。龍……。」

青年は一人一人に指をさしながら言った。

「お前……。。」

桂がそう呟き青年の顔をよく見た。  
その顔にある少年の面影を感じた。

「お前……。源みなもこのよしき義希か？」

桂が聞く。

青年は涙でぬれた顔をで頷く。

「泣き虫治ってねえーんだな。」

高杉が呟いた。

「泣き虫言っつな、このチビ助イ!!」

義希と言われた青年は元気な声で言った。

「お前がチビ。」

高杉があっさり返す。

「えっ知りあいなんですか？」

新八が驚いた声を出す。

「ああ。攘夷戦争時代のな。」

桂が答えた。

「お前らうるせーぞ。銀さん二日酔いなんだけど。」

銀時がダルそうに起きてきた。

「ぎいゝん!!」

義希は銀時に飛びこんだ。

「うおっ!？」

銀時はそのまま後ろに倒れた。

「このバカヤロー!! お前のせいで俺がどんだけ悲しんだのかわかってんのかイ？」

義希は目に涙をためて言った。

「お前・・・義希？本当にあの義希か？」

銀時が驚いたように言った。

「そう。あの泣き虫でチビの義希でさア。」

義希が明るく言った。

「懐かしい。全然変わってねえーじゃねーか……。」

銀時は笑顔で言った。

「背も全然伸びてねえーな……。」

青年を見ながら銀時は呟いた。

「伸びてるでさア。ちゃんと伸びてるでさア。」

義希が頬を膨らませて言った。

「でも、顔もあんまり変わってないよね。童顔ってことかな？」

露吞が言った。

「ホントアル。新八より全然子供顔ネ。」

神楽が呟いた。

「童顔じゃないでさア。それに、未成年だからこれくらいがいいんでさア。」

義希が反抗していった。

「てか、銀ちゃん。この人だれアルカ？」

神楽が聞く。

「ああ……。語んのダリーから自分で言ってくれや……。」

銀時が言った。

「はあー。相変わらずだねイ。えつと俺ア、源 義希。歳は19でさア。」

義希が言った。

「桂さん。さつき攘夷戦争に出てるって言いましたよね……。」

新八が言った。

「言ったが……？」

桂が不思議そうに言った。

「嘘じゃないですか！だって出たのは今から十年前ですよ。計算合わなくないですか？」

新八が聞く。

「合つてさア。だって俺、9歳で出てるからねイ。」

「えつ……。9歳で？」

新八が間抜けな声を出す。



「そつだよ。コイツまぎれもなく9歳で攘夷戦争に参加してるんだから。」

銀時がダルそうに言った。

「メツチャ強かったよね。ねえ銀時。」

露吞が言った。

「ああ、刀なんか振り回したらそりゃすごかったぜ。」

銀時が言った。

「お世辞はいいでさア、銀時。」

義希が笑顔で言った。

「で、聞きたいことがあるでイ。」

義希はいきなり大人っぽくなって聞いた。

「六鬼神を狙ってる奴が居るって奴。あれ本当の話かい？」

「ああ。」

桂が言った。

「お前さすがだな……。情報収集はもってこいだもんな……。」

高杉が呟いた。

「じゃあ。このことア知ってるかい？」

義希がニヤツと笑って言う。

「そいつらが特に欲しがってんのが『日華』の隊長ってこと。」  
「んだとおー!!」

桂、高杉、露吞、龍銀が同時に叫ぶ。

「おい、なんで日華を狙う？そんな有名じゃねえーだろ？」

桂が聞く。

「これは俺の予想だけど……。そいつらは六鬼神を使って大規模なテロを起こすつもりだと思ったださア。」

義希が言った。

空気が一気に重くなる。

「あの……。桂さん。日華って？」

新八が聞く。

「日華というのは攘夷戦争時代に銀時が率いた部隊の事だ。龍銀も義希もそこに所属しててな龍銀が『第二の白夜叉』義希が『殺しの情報屋』なんて呼ばれていたな。」

桂が大人っぽく言った。

「じゃあ。狙っているのって……。」

「ああ。銀時の事だ。」

桂が言った。

「つーか、なんで俺？」

銀時がダルそうに聞く。

「知らねエーでさア。」

義希が呟いた。

「ともかく。俺らはさらに警戒しなきゃなんなくなつたな、特に銀時。お前は絶対、油断すんなよ。」

桂が言った。

「わーってる。つーか、義希。お前どうすんだ？」

銀時が言った。

「うーん。邪魔じゃなかったら居候させてくれイ。」

義希が言った。

「やっぱそうなるか……。仕方ねえー。第二の弟みてーなもんだからな……。」

銀時が言った。

「そつだ。俺らはそろそろお暇させてもらつ。じゃーな銀時。」

桂はそう言い出て行つた。

「わしらも帰るがか。」

辰馬と陸奥も帰つた。

「銀時。気をつけてね。」

「テメーの事だから心配はしねえーよ。」

高杉と露呑も帰つて行つた。

「日華つて誰がつけたんですか？」

全員が帰つた後、新八が聞いた。

「俺ですぜイ。日華の『日』は銀色。『華』は赤色。俺ら3人の髪の色をとつたわけデイ。」

義希が言つた。

「俺は結構気に入ってんだよね。」

銀時が言つた。

「俺も!!」

龍銀も元気よく言つた。

その後、万事屋銀ちゃんはいつも道理の暇な生活に戻った。

銀・・・。

俺アはお前らを護ってやるでさア。

子供だった俺を護るために六鬼神の中には入れなかった事のように・  
・・。

俺にしかできないことをやるでさア。

#### 第十四訓 子供の元攘夷志士（後書き）

どうでしたか？

義希は結構なガキだけどやる時はやります。

かなり・・・。

感想お願いします

## 第十五訓 襲撃（前書き）

残酷なシーンあり。

ご注意ください。

## 第十五訓 襲撃

「なんかついてきてるなア・・・。」

義希は呟いた。

銀時からおつかいを頼まれてコンビニでイチゴ牛乳を買いに行った  
義希はとおりに少ない道を歩いていた。  
時は夜。

「俺に何か用ですかイ？」

義希は前を向いたまま言った。

「源 義希殿とお見受けする。」

ついてきてる奴が言った。

「勘違いでねえーですかイ？」

義希が言った。

「俺らはお前に人質の交渉にやってきた。抵抗せずについてこい！  
！」

男は言った。

「そうやってついてく奴がいるかイ？おめーらあれだろイ？六鬼神  
を狙う奴の下っ端だろイ？」



義希は聞く。

「そのとうりだ。」

「ならなおさら、ついてけいけねえですねい。」

義希は振り返り、刀を抜いた。

男は手を振った。

それと同時にあらゆるところから男どもがやってきた。

「うーんざつと見、50くらいですねい。」

義希が言った。

「どうだ？これで諦めたか？」

男が言った。

「逆でイ。こんくらい朝飯前ですぜイ！！」

義希はそう言い、男どもの中に入って行った。

「死ねエー！！くそヤローども。」

義希は刀を振る。

男どもは斬りかかる。

ブシュウウウ！！

男から大量に血が飛んだ。

「全部返り血でやってやるぜイ。」

義希はそのまま刀を振った。

それを男が受け止める。

その横から男が刀を振る。

義希は左手で短刀をとり、横から出た男に短刀を突き刺す。

ブシューウウウウウー！！

そして、短刀で刀を止めた男にも突き刺す。

男から血が飛ぶ。

「情けねエ……。」

義希は呟いた。

「なにをしている潰せエ！！」

リーダー格の男が言った。

男どもは走り出す。

「死ね！！」

どんどん刺す。

刺しまくる。

15分ほどで立っているのは男と義希だけになった。  
義希は刀をしまった。

「ほら、返り血だけに済ましたぜイ。」

義希が頬や着物に血が付いている。  
全てやったやつで……。

「さすがというところだな……。殺しの情報屋。」

男が呟いた。

「だが残念。」

男がそう呟いた時、横から男が出てきた。

「なっ!!」

ブシュウウウウ!!

「ぐあ!!」

義希が言った。  
わき腹から血が出ている。

「油断したのが悪かったな。返り血だけじゃなくなっただぜ。」

男が言った。

「色々と騙すのがすごいねエー……。」

義希は無理して作った笑顔で言った。

（ヤベーな。意識が．．．。）

義希はそのまま倒れた。

「ハア、ハア、ハア、ハア。」

義希は横になつたまま息の音だけがした。

「さすがだな．．．。これで工藤様も喜ぶことだ。」

（工藤．．．様．．．だと．．．。）

義希はそのまま意識を手放した。

「フン。やっと気絶したか．．．。」

男はそう言い、義希を担ごうとしたその時．．．。

「ウラアアアアアア！！」

一人の女と一人の男が来た。

「なんだとお！！」

男が声を上げた。

その隣でさつき義希を斬った男から血が飛んだ。

「義希が負けるとは珍しいな．．．。」

高杉が言った。

「そつだよねえ、だって銀時より強いんだから。」

露吞も言った。

「おめーら六鬼神の高杉 晋助と芦咲 春榎か。」

男が呟いた。

「そのとおり。私が芦咲 春榎。」

「俺アが高杉 晋助。」

高杉と露吞が言った。

「オメーもやってやるよ……。」

高杉が冷たく言った。

「失敗だな……。」

男はそう言い去って行った。

「義希イ!!」

露吞が叫んで、義希の方へ走っていく。  
そして、脈に手を当てる。

「ふう……。良かった、脈はある……。」

露吞が言った。

「こいつも無理するな・・・。」

高杉が呟いた。

「男なんてみんなそういうもんだよ・・・。」

露吞が呟いた。

「ククク。そうだな・・・。」

高杉が言った。

「じゃあ、高杉。義希を担いで万事屋まで行こうか？」

露吞が言った。

「俺が担ぐのか・・・？」

「うん。だって男じゃん。」

露吞が元気に言った。

「しゃーねえな。」

高杉はそう言い、万事屋へ行った。

「来客中か？」

高杉は玄関を開けて呟いた。

「この下駄……。」

露吞が呟いた。

そこへ、新八が奥からやってきた。

「高杉さんに露吞さん。……って義希さんどうしたんですか？」

新八が驚きの声を上げた。

「散歩しているときにな義希とバカな男どもを見つけてね。」

露吞が言った。

「おい、どうしてって……えっ!!」

銀時がやってきて声を上げた。

「銀時、大丈夫。脈はしっかりしてるよ。」

露吞が言った。

「義希もか……。」

銀時が呟いた。

「もかってどういう意味だ……？」

高杉が聞いた。

「もしかして、辰馬にも何かあったのか？」

露吞が聞く。

「辰馬じゃねえーが、陸奥がよ．．．。」

銀時が呟いた。

「あの子も？」

露吞が心配そうに言った。

「ああ。そんな大きな傷じゃねえーがな。」

銀時が呟いた。

そこへ、桂がやってきた。

その後ろには．．．。

「晋助様、大丈夫っスか？」

「また子！それに、河上に武市に神威、阿伏兔．．．。」

露吞が言った。

「オメーらがどうして．．．。」

高杉がそう呟いた。

そして、あることに気付いた。

「お前ら、返り血だらけじゃね？」



銀時が言った。

「そうっす。なんか知らない奴らが襲ってきて、人質になれとか意味分かんねえッス。」

また子が明るく言った。

「全部返り討ちにしたいでござる。」

河上も言った。

「それ・・・わしも、言われたき。」

陸奥が肩を押さえてやってきた。

「陸奥、無理するじゃなか。」

辰馬が心配そうに言った。

「大丈夫じゃき。わしはそんな馬鹿じゃないぜよ。」

陸奥が言った。

「じゃあ、義希もそんなこと言われた可能性大だな。」

銀時が呟いた。

「ともかく傷の手当てをするべきだ。」

桂がそう言い、高杉たちも中に入った。

「むっち、大丈夫アルか？」

神楽が聞く。

「みんな心配性じゃな。」

陸奥が明るく言った。

肩には包帯が巻いてあった。

「こいつは何で怪我したんだ？」

高杉が言った。

「刀で肩斬られただけじゃき。」

陸奥が言った。

「ま、辰馬のおかげで助けられたんじゃがな。」

陸奥が付け足すように言った。

「で、ッラ。義希は大丈夫か？」

銀時が聞く。

「ああ。大体の血が返り血だし、大きな傷はわき腹だけだからな。」

桂が言った。

「良かった。」

そのまま、銀時たちは寝た。

次の日。

「ここは・・・。」

義希は眼を開けた。

「痛っ！！」

わき腹に激痛がはしった。

「起きたか？」

桂が言った。

「ツラ・・・。」

義希が言った。

「礼は高杉に言え。ここまでお前を連れて来たのは高杉だからな。」

桂が言った。

「ここは・・・銀時のところ？」  
「ああ。」

少しの沈黙が続いた。

「動き出したな……。」

桂が呟いた。

「ああ……。」

義希が短く返事をする。

「おお、起きてたのか？」

銀時が起きてきた。

その後、大体の人が起き始めていた。

そして、9時ごろ……。

ピンポーン。

「はい。」

いつも道理、新八が出た。

「よう、眼鏡。」

「土方さん、沖田さん、それに近藤さんまで。どうしたんですか？」

新八が聞く。

「そこらの路地で50人ほどが斬り殺されててな。お前らしらねえ

「か？」

土方が聞く。

「えっと、僕は知り『それやったの俺ですぜい。』ってえっ？」

新八の声を義希が遮る。

「はっ？てかお前、誰ですかイ？」

沖田が聞く。

「俺は源 義希。歳は19ですぜい。」

義希は明るく言った。

「で、幕府の狗、立ち話やめたほうがよくね？」

龍銀が言った。

そして、真選組は中に入ってびっくり。

「なんか、色々いねえーか・・・？」

土方が呟いた。

「それはな、昨日あちらこちらで襲撃されてな。ま、その犠牲が義希と陸奥に鬼兵隊のこいつらってことかな？」

銀時が言った。

「で、なんで俺アがやられるわけですかイ。大体あのクズ。一人隠してたとかありえねエー。あの一人が居なかったら全部返り血で済ましたんでイ。」

義希がブツブツと言っている。

「お前は銀時よりも強いからな……。」

桂が呟いた。

「おい……桂ア……今何て言っただんですかイ？旦那より強い？こいつが？」

沖田が驚いた声で聞く。

「そんなことねエですぜイ。銀より強いわけありませんでイ。」

義希が言った。

「そんなことねえーよ、お前50人を一人でしかも全部返り血で殺すなんてお前にしかできねえーことだよ。」

銀時が言った。

「そうかい・銀もやろうと思えばできるんじゃないですかイ？」  
「できたら天才だろ……。」

銀時が呟く。

「そうだ、幕府の狗。新たな情報をもらっただぜ。」

高杉が言った。

「なんだと！」

土方が言った。

「あいつらが特に狙ってるのが日華の隊長。」

桂が言った。

「日華？」

沖田が聞く。

「日華は銀時が率いていたんだよ。隊員には龍銀に義希が居たね。」

露吞が笑顔で言った。

「つまりはあいつらが狙ってるのって……万事屋か？」

近藤が聞く。

「そのとおりだ。」

桂が答える。

「ひとつ聞いていいですかイ。義希って攘夷戦争に参加していたんですかイ？」

沖田が聞く。

「そうですね。9歳で参加してたんですア。」

義希が笑顔で言った。

「9歳イ!？」

真選組が驚きの声を上げる。

「そんなに驚くことですかイ？」

義希が聞いた。

「ふつうはそうだろ・・・。」

「てかなんでそんなガキが攘夷戦争に参加なんかしてたんですかイ？」

沖田が聞く。

「それは・・・。」

義希が口ごもる。

「まあ、いいですよ。」

沖田が言った。

「じゃあ、今回のことはうまくわいにふせとく。お前ら気をつけ



ろよ。」

土方はそう言い、去って行った。

「お前らどうすんの？俺んどこに居すわんのか？」

銀時が聞く。

「お前が困らなければそのつもりだ。」  
「俺もだ。」

桂と高杉が言った。

「仕方ねえー。あんま大きなことすんじゃねえーぞ。特に神威！」

銀時はそう言い、神威に念を押す。

「お兄さんひどいな。」

神威が声を漏らす。

「特に神楽と喧嘩しないように！！！」

銀時は更に念を押し、また寝転がった。

「銀は本当によく寝るな……。」

義希が呆れた声を出す。

「それが、銀時の凄いところだよ。」

露吞も笑いながら言った。

## 第十五訓 襲撃（後書き）

どうでしたか？

銀魂の新OPとEDめっちゃかっこいい。

特にOPの神威と高杉が。

神威がかわいい。

そして、真選組もめっちゃかっこいい！！

あれは最高です。

感想お願いします

## 第十六訓 いたずら書き

「暇だァー！！」

義希が言った。

万事屋銀ちゃんに居るのは高杉、露吞、神威、阿伏兔、鬼兵隊の人たちに、義希、それに辰馬と陸奥。

「お前は安静にしてろ。」

高杉が言った。

「なんでイ。もう怪我治ったってイ。痛っ！」

義希が言った。

「どこが治ったの？」

露吞が呟いた。

「男って安静って言葉知らないんだから仕方ないッス、姉様。」

また子が言った。

「男はバカじゃきにのー。」

陸奥も言った。

「はいはい分かりましたよ。俺アバカですぜイ。」

義希が頬を膨らませて言った。

「アハハハハ。男はバカの方がいいぜよ。」

辰馬が言った。

義希はニコツと笑顔になった。

「ま、陸奥も義希も怪我を治すのが先じゃがな。」

辰馬が付け足すように言った。

「分かったきに。」

陸奥が素直に言った。

「はいはい。分かりましたよオ。」

義希も頬を膨らませているがちゃんと返事をした。

「でも、暇すぎじゃねえーですかイ？」

義希が呟いた。

「ああ。それは分かる……。」

高杉も呟いた。

「仕方ないぜよ。留守番じゃきにのー。」

辰馬が言った。

「俺どこかに行きたい。江戸なんか来んの久しぶりなんだよ。」

神威が呟いた。

「グーグー。」

「つか、阿伏兎はまだ寝てんのか？」

高杉が聞く。

「だね。」

露吞が答えた。

「大人のくせにして情けねえーですぜイ。」

義希が呆れたように呟いた。

「あ、そうだ。暇つぶしに。」

神威がニコツと笑って言った。

そして、机の上から筆を取り出した。

「いたずら書きをしろ。」

神威は筆で阿伏兎の顔に何かを書いた。

「アハハハハハハッ。」

義希が腹を抱えて笑った。

阿伏兔の頬にぐるぐるが書いてある。

「似合うでござる……。」

河上が呟いた。

「以外ですね……。」

武市も呟いた。

「もっとやろうぜい。」

義希は阿伏兔の眼にまつ毛を書いた。

「プツ、ハハハハハハ。」

神威も腹を抱えて笑った。

「わしも書くぜよ。」

辰馬も阿伏兔の顔に色々書いた。

「アハハハハハ。」

神威と義希が腹を抱えている。  
そこで、阿伏兔が起きた。

「ゲツ……。」

「お前ら何やってんの？」

阿伏兎は神威と辰馬、義希の持っている筆を見て言った。

「いや、これにはわけというものが……。」

それからというもの……。

万事屋銀ちゃんでは、しばらくの間騒がしかったとさ。



第十六訓 いたずら書き（後書き）

どうでしたか？

しょうもねえー話になりました・・・。

感想お願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9807z/>

---

鬼の女～血の娘～

2012年1月13日18時52分発行